

ひろしま郷土資料館だより NO.101

特別展「広島県の災害の歴史－自然の猛威と先人の知恵」

会期：令和2年12月12日（土）～令和3年2月28日（日）

近年、集中豪雨による河川の氾濫^{はんらん}や台風による高潮や突風による被害など、これまでの想定を超える自然災害に関する報道を耳にする機会が増えています。平成30年の西日本豪雨では、被災した地域に過去の被害を伝える水害碑が残されていたことをきっかけに新しい地図記号「自然災害伝承碑」が制定されるなど、過去の災害と水害碑など地域に残された伝承を見直す動きが広がっています。今回の展示では、災害というテーマを地形や歴史の面から広島県の町の成り立ちを振り返り、過去の事例をとおして災害に対する先人の取り組みを紹介する内容で構成しました。

現在の広島県の町は、太田川が広島湾へそそぐ河口部に土砂が堆積してできた三角州の上に成り立っており、町の成り立ちの基礎は広島城が築城される16世紀後半にさかのぼります。川や海に近い立地は、城の防衛面に加え、漁業などの生業^{なりわい}や生活用水など人びとの生活を支える糧として、また川や海を利用した水運と陸上の街道筋とが交わる交通の要所となり、広島城下の発展を支える大きな役割を果たしました。江戸時代以降、街の発展とともに干拓と埋め立てによって土地を拡げ、海岸線は現在の平和大通り付近から南へ約2km延びたとされています。明治以降も、宇品港築港や広島工業港の建設計画、太田川放水路建設による埋



地域に残る水害碑
(いずれも当館撮影)

【左上】
安芸郡坂町小屋浦

【左下】 安芸郡坂町
【右下】 安芸区矢野東坂東



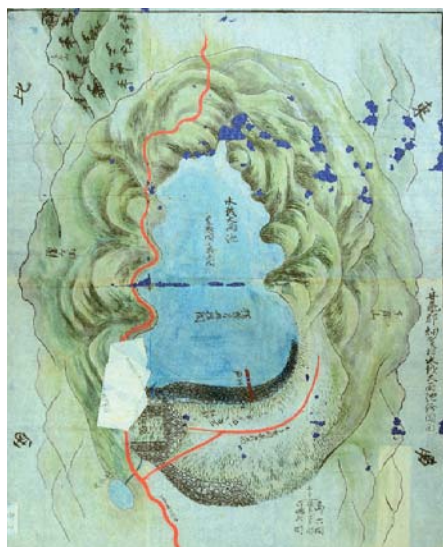
『広島全景図』（広島城蔵）

広島城の西にあたる現在の西区己斐付近から江戸時代の終わりに近い時期の広島城下の景観を描いた鳥瞰図^{ちようかん}。西国街道^{うんせき}や雲石街道、街道筋の町並み、城下を取り巻く太田川の分流の様子や川を上り下りする舟運など、海や川に近い立地と城下町全体の様子をとらえることができます。

目次

- | | | | |
|---------|--------------------------------------|-----|---------------------------------------|
| P 1 - 3 | 特別展「広島県の災害の歴史－自然の猛威と先人の知恵」
図録新刊紹介 | P 6 | 活動報告 教室事業日程一覧
(令和2年10月～令和3年3月分) |
| P 3 - 4 | 企画展「福井芳郎とがんす横丁の世界」 | | 活動報告 郷土史講座・その他事業
(令和2年10月～令和3年3月分) |
| P 4 - 5 | 企画展「『ごんぎつね』が語る昔の暮らし」 | P 7 | 令和2年度の寄贈資料 |
| P 5 | パネル展示「広島湾の遷り変わり」 | P 8 | 次年度企画展の予定 |

め立てが進み、地形と海岸線も現在の町の形状に近づきます。一方、川の堆積作用で河口付近に形成された三角州と干拓と埋め立てで発展を遂げた町の立地は、土地が低く地盤も軟らかいため、地震発生時には液化化しやすく、太田川の氾濫による洪水や広島湾沿岸部での高潮といった水害にも古くから幾度も悩まされてきました。干拓と埋め立ての変遷と土地の高低差を対比すると、干拓が行われた地域では周辺に比べ土地の標高が低く、また埋立地では干拓地よりも標高が高くなっています。干拓で土地が形成された場所で浸水が起こった場合、水が残りやすい傾向があり、現在も水害に弱い側面があることを読み取ることができます。このような町の成り立ちと立地条件をもとに、広島でも比較的遭遇頻度が高いと想定される地震と水害について、過去の事例と先人の取り組みを絵図や古文書、古写真等で紹介しました。(なお、土地の標高や浸水想定区域に関する地図は、国土地理院や太田川河川事務所のホームページで見ることができます。)



▲「安芸郡畑賀村水越大雨池図面」(広島市公文書館蔵)

安政4年の大地震でため池が損壊した際の修理の見分のために作製された絵図です。絵図作成の経緯を描いた付せんが添付されています。

水害については、先に述べたとおり浸水しやすい立地であることから、毛利氏・福島氏の治政下よりその被害と対策に苦心していたことがうかがえます。浅野氏の治政下でも、承応2年(1653)や寛永8年(1769)、嘉永3年(1850)の大洪水など、城下の水害は大規模なもので66回を数えています。水害発生の都度、河川の護岸築堤や川の浚渫、上～中流域で御建山・御留藪といった水害防備林の整備や下流域での水制の建設による水流の調整、水尺による水位の監視と防備体制など、町や人々の暮らしを守るため様々な治水対策が講じられました。明治から終戦頃にかけても明治17年(1884)、30年(1897)、大正3年(1914)、5年(1916)、8年(1919)、12年(1923)、15年(1926)、昭和3年(1928)や昭和20年(1945)の枕崎台風など数年に一度のペースで長雨や台風、高潮による被害を繰り返します。これらの根本的な解消は、昭和7年(1932)の着工から36年の歳月をかけ昭和43年(1968)に完成した太田川放水路がその役割を担いました。また、広島や福山は花崗岩が風化してできたマサ土で地盤が崩れやすい地域が多く、山林の荒廃と大雨や長雨が原因で発生した土砂災害を防ぐ対策として、

今年は平成13年(2001)3月の芸予地震の発生から20年目にあたります。最新の地震研究によると、この地震は概ね50年周期の発生が指摘されています。近世以降で記録が残っているもののうち、地震の規模や被害の範囲などから、芸予地震の名称で呼ばれている明治38年(1905)と平成13年のものに加え、慶安2年(1649)・貞享2年(1685)・享保18年(1733)・安政4年(1857)・昭和24年(1949)が該当するとされています。また、南海トラフを震源とする地震の一つ、嘉永7年(1854)の安政南海地震では、『村上家乗』(広島大学文学部日本史学研究室蔵)や『老いのくりごと』、『御旧記』(いずれも広島県立文書館蔵)などの文献資料から城郭や屋敷など建物の被害や当時の城下の人びとの騒然とした様子をうかがうことができます。



▲「広島県太田川水害実況写真」より
大正15年9月洪水 幟町小学校前浸水状況
(広島市公文書館蔵)



▲紅葉谷川庭園砂防の様子(画像は流路工付近)
(当館撮影)

昭和20年9月の枕崎台風での土砂崩れ復旧のため、景観保持と治水砂防機能の両立を目指して建設されました。令和2年12月、戦後の土木建築として初の国の重要文化財に指定されました。

砂留(福山市)や紅葉谷川庭園砂防(廿日市市)など、砂防施設の整備が進められた地域もありました。

広島町の発展は、治水と干拓・埋め立ての歴史とともにあり、町を取り巻く自然環境や立地条件は発生する自然災害の要因を知る手がかりとなります。私たちが暮らす町の成り立ちやたどってきた歴史、度重なる自然の猛威に対して先人が行ってきた様々な取り組みを今一度振り返ることをとおして、今後想定される災害に私たち一人ひとりができる防災と備えを意識するきっかけとなれば幸いです。(川橋奈織)

会期中の来館者：890人(新型コロナウイルス感染拡大防止集中対策との重複期間：令和2年12月12日～令和3年2月21日)

新刊紹介 特別展図録「広島県の災害の歴史—自然の猛威と先人の知恵」



●目次

はじめに
目次・凡例
広島町の成り立ち
人びとを悩ませた自然の猛威
地震／水害
先人の知恵と工夫
太田川の治水対策
砂留・紅葉谷川庭園砂防
過去の災害を伝える石碑
広島県の災害関係年表

参考文献

謝辞・協力者・奥付

定価：450円(税込)

送料：215円(ゆうメール)

発売：令和2年(2020)12月12日

A4判 36ページ(カラー)

企画展「福井芳郎とがんす横丁の世界」

会期：令和3年3月13日(土)～5月5日(水・祝)

みなさんは「がんす横丁」をご存知でしょうか？昭和24年(1949)から昭和36年(1961)まで断続的に355回中国新聞に連載された随筆で、戦前の広島町の盛り場・世相・風俗など失われた町の風景が紹介されています。筆者である薄田太郎氏はNHK広島放送局の元アナウンサー・郷土史家・大衆芸能評論家で、昭和42年(1967)に死去しました(享年64歳)。没後、薄田氏の長男によって「がんす横丁」「続がんす横丁」「続々がんす横丁」「がんす夜話」の4冊の本として出版されています。

令和3年3月13日から5月5日まで、郷土資料館ではこのがんす横丁シリーズに掲載されたさし絵を紹介する「福井芳郎とがんす横丁の世界」を開催しています。新聞連載にあたって、さし絵を担当したのが画家の福井芳郎氏でした。広島出身で被爆者である福井氏は、原爆投下1時間以内に燃え上がる街をスケッチし、「最初に原爆を描いた画家」として知られています。以後多くの原爆の絵を制作しましたが、本来は風景画を得意としており、その手腕は「がんす横丁」シリーズのさし絵制作でいかに発揮されています。

また、福井氏による「がんす横丁」のあとがきによると、連載中に薄田氏とはよく町角で出会い、そのまま喫茶店に入ってコーヒーを飲みながら連載について語り合ったそうです。こうした二人の関係と熱意と失われた町に対する愛情が、「がんす横丁」シリーズをより魅力的なものにしたのだと思います。さし絵はおおよそB5サイズ程度にカットされた画用紙に、墨・白絵具・サインペン・ボールペンなどで描かれています。みな一様ではなく、墨のみで描かれているもの、サインペンやボールペンで輪郭を描いているもの、ボールペンだけで描かれているものなど、タッチが違う絵が見られます。もしかすると、新聞紙上で印刷するにあっ

て、より適当な表現を模索していたのかもしれませんが。

「がんす横丁」は連載開始時には「夢の盛り場」というタイトルでした。薄田氏は広島での盛り場の賑やかさを大変愛していた人だったのです。特に、戦前の盛り場で営業していた劇場・映画館、そこで上演された寄席・演劇や映画に関する造詣が深く、その記述内容は一級資料になっています。そのため福井氏も多くの盛り場を描いています。近代広島最初の盛り場となった中島本町（現在の平和記念公園）を始め、興業の中心地だった八丁堀・新天地・西遊郭



写真1 西遊郭 広島市公文書館 蔵
「続々がんす横丁」p.62掲載

（現在の中区舟入町・小網町／写真1）・東遊郭（現在の中区弥生町）の描写は、盛り場の華やかさや集まる人々の息吹を伝えてくれます。

一方で、盛り場でも名所でもない場所の描写も多く見られます。写真2は「天満屋小路」（中区堀川町）の様子を描いています。この小路は江戸時代からこの名で呼ばれていた有名な道でしたが、戦後中央通りの建設に伴って消滅しました。こうした写真も残っていないような路地裏の雰囲気も知ることができるのです。

「がんす横丁」のあとがきによると、福井氏はこれらの絵を記憶に頼って描かれたようです。おそらくは実際にその場所に立ち、記憶の中のかつての風景を思い起こして描き出したのでしょう。そのため、やや正確さにかける部分もありますが、今は私たちが味わえない当時の空気感を知ることができるのです。企画展をとおして福井氏のさし絵の魅力の一端が伝われば幸いです。（本田美和子）



写真2 天満屋小路 広島市公文書館 蔵
「続々がんす横丁」p.62掲載



写真3 天満屋小路があった場所の現状（当館撮影）
広島アサヒビール館付近から北に向かって撮影

企画展「『ごんぎつね』が語る昔のくらし」

会期：令和2年9月5日（土）～11月29日（日）

秋の展示として、恒例の企画展となっている「『ごんぎつね』が語る昔のくらし」。小学校4年生の国語で習う新見南吉の代表作『ごんぎつね』のお話をたどりながら、その場面の昔の道具を展示することによって、物語の世界に入り、昔の生活を想像・実感できるような展示構成となっています。子どもたちも実物を見ることによって昔の生活を想像・実感しやすくなります。物語の世界に入り込み、兵十やごんの心の動きを考えるとより深く新美南吉の世界に入っていくことができます。また、小学校3年生社会科でも「昔の道具とくらし」を学習するので、写真だけではなく実物を見ることにより学習効果があがるはずです。また、物語の中に

道具が登場するので、より使い方のイメージが沸いたのではないのでしょうか。当時あるものを最大限有効に使って、より豊かなそして便利な生活を目指した昔の人々の知恵と工夫を感じることができたでしょう。会場には、「今、『ごんぎつね』を習っている。」と国語の教科書を持ってきて展示を見ていた小学生と保護者。「昔、家にこれあったよ」と言われる年配の方。幅広い世代の方々に楽しんでいただきました。

関連イベントとして、9月19日（土）には、広島市こども図書館の司書の先生にきていただいて、「『ごんぎつね』のおはなし会ときつねの起き上がり人形作り」を開催し、「ごんぎつね」など新見南吉の物語3篇の読み聞かせ・展示解説・小さなきつねの人形に色を付ける簡単工作を行いました。また11月3日（火・祝）には、(1)新美南吉の故郷、愛知県半田市のマスコットキャラクター「ごん吉くん」を使って、「クイズラリー『ごんぎつね』と学ぶ昔の暮らし」と(2)「きつねのミニ人形に色を付けよう」を行い、多くの方に参加していただきました。来館された方々に、新美南吉のこと、「ごんぎつね」の世界を知っていただけたと思います。(河村直明)

開館中の来館者数：3,637名



会場風景

物語に出てくる昔の道具が順に展示されています



司書の先生による「ごんぎつね」読み聞かせ

パネル展示「広島湾の遷り変わり」

会期：令和2年9月5日（土）～11月29日（日）

共催：第六管区海上保安本部海洋情報部

我が国において、初めて海図作製を専門的に行う組織が設立されたのは明治4年（1871）で、明治政府の置かれた兵部省海軍部水路局が始まりでした。現在の海上保安庁海洋情報部は同水路局の流れを汲み、戦前戦後の海図作製業務を担い続けて、今年150年を迎えました。一昨年、広島港は明治22年（1889）の完成から130年を迎えました。広島港の海図が初めて整備されたのは明治28年（1895）で、その後の港の遷り変わりは海図に記録されています。



展示のようす

今回のパネル展では、第六管区海上保安本部 海洋情報部が所有する古い海図の中から戦後の広島港の海図4枚を選び、現在までの移り変わりを紹介しました。また、「宇品・出島」の海岸線の変化を昭和23年（1948）の海図と現状写真を比較したパネルも展示しました。来館者は、海図から見た広島戦後発展の歴史を熱心に見ておられました。

(河村直明)

開館中の来館者：3,637名

活動報告

令和2年10月～令和3年3月

教室事業

実施日	事業名	参加者
10月17日(土)	教室 「手すきハガキ作り」	15名
10月24日(土)	親子教室 「お手玉作り」	7組17名
11月14日(土)	大人向け教室 「水引き飾り作り」	22名
11月28日(土)	親子教室 「絵手紙で年賀状作り」	7組18名
12月19日(土)	親子教室 「羽子板作り」	新型コロナウイルス感染拡大防止集中対策期間のため中止
12月26日(金)	教室 「もちつき体験」 →「あぶり出しアートに挑戦！」に変更	
1月17日(日)	教室 「けん玉教室」	
1月30日(土)	親子教室 「糸つむぎ体験」	
2月13日(土) →2月21日(日)に変更	教室 「バウムクーヘン作り」 →大人向け教室 大人の染色体験「ろうけつ染めで風呂敷作り」に変更	10名
3月20日(土・祝) →3月13日(土)に変更	教室 「ぼたもち作り」 →「もんきりのランタン作り」に変更	15名

文化の日スペシャルイベント (令和2年度「駄菓子作り広場」は新型コロナウイルス感染症予防の観点から中止)

実施日	事業名	参加者
11月3日(火・祝)	クイズラリー「ごんぎつね」と学ぶ昔の暮らし	119人
	きつねのミニ人形に色をつけよう	45人

ひろしま郷土史講座

実施日	事業名	参加者
11月7日(土)	フィールドワーク「宇品・出島散策～新旧海岸散策～」	19人
12月5日(土)	第1講「広島平野の成り立ち～最終氷期から現代まで～」	41人
1月9日(土) →2月13日に延期	第2講「広島の災害の歴史－自然の猛威と先人の知恵－」	45人
2月6日(土) →2月27日に延期	第3講「海から見る広島－海図の話を中心に－」	中止
3月6日(土)	第4講「自然の恵み－江戸時代の安芸の名産・特産－」	44人

その他の事業

実施日	事業名	主催等	参加者
10月25日(日)	工作指導「みつばちのからくりのぼり人形」	秋のグリーンフェア2020実行委員会	157人
11月27日(金)	講演「広島歴史散歩」	広島市中区老人クラブ連合会	36人
12月3日(木)	講演「広島の歴史について」	広島市経済観光局観光政策部観光企画担当	30人
12月6日(日)	オンライン配信「西国街道ってなんじゃろう?～西国街道みみより斬」	まちなか西国街道推進協議会	—
	同「歴史トーク～江戸時代の広島は、きれいだった!？」	・西国茶や Bar 実行委員会	—
12月7日(月)	授業「博物館資料論」	広島市立大学	37人
12月10日(木)	講演「忠臣蔵と広島」	安佐南区図書館	21人
2月17日(水)	授業「文明開化の時代の広島」	まちなか西国街道推進協議会・袋町小学校	47人
2月20日(土)	講演「広島のお花見 花がなくても花見に行くの?」	南区図書館	17人

令和2年度の寄贈資料

コロナ禍で家の整理をなさった方も多かったのか、例年以上に資料寄贈の問い合わせがありました。まだ手続き等が続いていますが、今年度受入予定の資料の一部をご紹介します。

1 宇品陸軍糧秣支廠関係資料

宇品陸軍糧秣支廠および奉天（現在の中華人民共和国瀋陽市）陸軍糧秣支廠に勤められた方の書籍類や報告書の参考綴等の資料です。特に宇品陸軍糧秣支廠では缶詰が製造されていたことから、当時の最新研究書と思われる缶詰関係の書籍や、糧秣本廠発行の雑誌「糧友」、給養（軍隊での食事等の供給）についての書籍など貴重な資料が見られます。

2 広島陸軍被服支廠関係資料

被服支廠で工員長まで務めた女性と、その息子が被服支廠では雇員として働き、また歩兵第11連隊機関銃隊に所属した方の資料です。今年度は、被服支廠の建物保存が話題となる中、貴重な資料で、辞令書や賞状、従軍記事のほか、被服支廠構内で撮影された写真などもあります。

3 昭和40年代の電気バリカン

東観音町（西区）では、戦前にも電気バリカンを製造販売する会社がありましたが、この資料は、昭和20年代から平成20年代ごろまで、同地区で電気バリカンを製造販売していた別の会社のものです。モダンな箱入りのバリカンは、現在でもその性能のよさから中古品を求めて使っている理容師もいるようです。

4 昭和の家庭雑誌

戦前から高度成長期にかけての婦人雑誌の付録類です。料理、編み物、育児、礼法、家庭衛生に関するものなどがあります。くらしの中の変遷が読み取れます。

5 明治天皇行幸記念教育品展出品作品（刺繍）・賞状

昭和9年（1934）、明治天皇が日清戦争の時広島城内に行幸して40年になるのを記念し、式典が西練兵場で行われ、明治天皇行幸記念展覧会が広島城天守で開催されたほか、さまざまなイベントが行われました。「教育品展」もそのひとつで、資料は、当時小学校高等科の女生徒だった方が出品した刺繍作品と与えられた表彰状です。

6 銅蟲どうちゅう工房の工具等

広島県の伝統的工芸品に指定されている銅蟲は、江戸時代に浅野氏に保護された金工で銅を錘つちでたたき、藁をいぶして仕上げます。資料は、銅蟲職人だった松井明雄氏（号明宝、松井市長の父）のおられた工房「松井明宝堂」で使用されていた道具類です。松井氏が手掛けた銅蟲作品としては、広島市医師会原爆殉職碑にある2羽の鳩が知られています。

7 アメリカ製のカラーズライド

比治山や比治山から見た市街地、原爆ドームなどを撮影したもので、1961年と記されたものもあります。

その他、戦前の海外旅券、広島のような市街地図、現在の東広島市にあった賀茂郡原村の陸軍演習場の写真なども寄贈いただきました。これらの資料は、手続き終了後さらに精査を重ねたうえで、来年度末に開催予定の新収資料展での展示を予定しています。（前野やよい）

令和3年度(2021) 展示紹介

企画展 福井芳郎とがんす横丁の世界

令和3年3月13日(土)より開催中 ～5月5日(水・祝)

戦前の広島の路地や盛り場、世相、風俗について紹介した『がんす横丁』(シリーズ全4冊)に掲載されている地元の作家・福井芳郎氏によるさし絵の原画を中心に、当時の町や一般の人々の生活の様子を紹介します。



「旧広瀬町電停」福井芳郎 画(広島市公文書館蔵)

企画展 沸き立つ! 昭和39年ー57年前の広島ー

令和3年5月15日(土)～7月11日(日)

昭和39年(1964)、東京オリンピック当時の広島の出来事や暮らし、流行について、57年後の現在と見比べながら、原爆投下から19年経った高度成長期の広島を振り返ります。



広島県庁にオリンピック聖火到着(当館蔵)

企画展 夏休みおばけの博物館

令和3年7月22日(木・祝)～8月22日(日)

おばけ屋敷を追体験してもらうとともに、おばけの多様な世界や、おばけを生み出した昔の人々の生活を紹介します。



金魚おばけ

企画展 『ごんぎつね』が語る昔の暮らし

令和3年9月4日(土)～11月23日(火・祝)

新見南吉の童話『ごんぎつね』のストーリーをまじえながら、童話に登場する昔の道具や人々の暮らしを紹介します。



展示のようす

企画展 似島と金輪島ー軍用港を支えた二つの島

令和3年12月4日(土)～令和4年2月6日(日)

戦前に陸軍の港として機能していた宇品港。この軍用港を支えた似島・金輪島の役割にスポットを当てて紹介します。



似ノ島陸軍検疫所絵葉書 上陸棧橋(個人蔵)

企画展 広島を語るいくつかの資料たちー郷土資料館新収資料展

令和4年2月19日(土)～3月27日(日)

市民の方から寄贈いただいた近年の収集資料を中心に、それらが語る「広島」の歴史や伝統、暮らしなどの諸相を小テーマを設けて紹介します。



銅盥(当館蔵)

なお、新型コロナウイルスの感染拡大状況により、展示会期や教室事業等の変更または中止の可能性があります。ご迷惑をおかけしますが、ご了承くださいませようお願い申し上げます。最新の情報は当館ホームページ等でご確認ください。

ひろしま郷土資料館だより No.101

令和3年(2021)3月31日発行

編集・発行 (公財)広島市文化財団 広島市郷土資料館

734-0015 広島県広島市南区宇品御幸二丁目6-20

TEL (082) 253-6771 FAX (082) 253-6772

URL <http://www.cf.city.hiroshima.jp/kyodo/>



広島市郷土資料館

HIROSHIMA CITY MUSEUM OF HISTORY AND TRADITIONAL CRAFTS